

◆活動報告

第10回帰国訪問団の報告

2016年8月24日から30日、日本華人教授会議の帰国訪問団一行十数人は中国の北京市と新疆自治区を訪問した。

帰国訪問は十年前から始まった。一回目は2007年、北京を訪問した。その後、北京のほか、中国の一地方も訪問することが慣例となった。いままで、以下の地方を訪問した。2008年の二回目は湖南省、2009年の三回目は貴州省、2010年の四回目はチベット自治区、2011年の五回目は雲南省、2012年の六回目は吉林省、2013年の7回目は甘肅省、2014年の8回目は黒竜江省、2015年の九回目は内モンゴル自治区の呼倫貝爾(フルンボイル)市である。

いずれの訪問もテーマを予め決めて、北京で政府機関や研究機関と交流し、地方では当該地域の経済発展、文化と歴史、教育、観光などを視察する。今回の訪問は「一帯一路」の進展を視察することをメインテーマとした。

北京での交流活動

8月24日、訪問団の活動は北京で始まった。まず、中国外交部を訪問し、アジア司参事官楊宇氏が訪問団と懇談し、日中関係の現状、東シナ海と南シナ海に関する問題点を紹介した。訪問団のメンバーもこうした問題について意見を述べた。

その後、我々の訪問を招へい、アレンジしてくださった中国人民外交学会の劉玉和副会長が、歓迎の昼食会を催してくださった。劉副会長は、まず訪問団の帰国訪問を歓迎する意思を表明し、また、外交学会の歴史、担っている民間外交の特徴、中国外交に果たした役割を紹介した。訪問団一行も、日本の政治経済の実態を紹介し、日中関係の打開策、日中民間外交の在り方について意見交換した。

午後、訪問団一行は中国社会科学院法学研究所を訪問し、海洋法と海洋事務研究センターの劉楠来教授、王翰靈教授と南シナ海の仲裁案、断続線などを巡って懇談した。劉教授もオランダ・ハーグの仲裁裁判所(PCA)の仲裁員を務

めている権威者で、仲裁案の越権行為、不公平な判決、そしてその無効を指摘し、中国が主張する「九段線(断続線)」に関する問題についても意見を述べた。王教授はフィリピンが提出した仲裁案は、実質、米中間のパワーゲームであるとの認識を示した。

夕方には、国务院華僑事務弁公室(国僑弁)の裘援平主任が訪問団と会見した。裘主任はまず、訪問団一行に華人・華僑政策に関する意見を聞いた。その後、国僑弁が現在進めている重要な事業として、①海外の華僑華人の權益の保護、②海外の華人社会と華人団体の建設、③中国語教育の推進、などを紹介した。夜には、国僑弁が訪問団を歓迎する晩餐会を催して下さった。

ウルムチでの訪問活動

北京での交流活動を終え、8月25日、訪問団は空路にて新疆自治区の区都であるウルムチに向かった。国内便ではあるが、4時間以上もかかった。

当日午後、新疆自治区の外事・僑務弁公室は訪問団のため座談会を開いた。参加者は外僑弁副主任劉俊、対外開放領導小組弁公室主任毛輝、新聞弁公室副主任艾力提・沙力也夫、教育庁副庁長王莉莉である。座談会を通じて、訪問団は以下の問題への理解を深めた。

第一に、新疆における一帯一路の進展。新疆は西に開放し、一帯一路を推進する前線基地である。新疆はシルクロード経済帯の核心地域になることを目指して、昨年2020年までの行動計画を昨年に策定した。新疆は5つのセンター(交通、物流、金融、文化教育科学、医療)、3つの基地(石油・ガス、石炭、風力発電)、1つの通路(国家エネルギーの陸上大通路)を建設する。新疆自治区は核心地域建設の委員会(領導小組)を設立し、分野別に8つの小委員会(工作小組)を設け、総合、交通、エネルギー、貿易・外資・物流、金融、社会発展、産業発展、特区、地域経済協力などの分野をカバー

する。

新疆は阿拉山口、カシュガル（喀什）、ウルムチに3つの特区・保税區を設けた。また、新疆の企業は隣接する中央アジア諸国に6つの工業団地を設立した。

物流については、新疆經由の中欧間コンテナ鉄道輸送が定期便となり、現在は中欧間貿易の3%しか占めていないが、今後10%に拡大する。鉄道輸送は海運より一カ月の時間節約となる。中国から欧州へのコンテナはウルムチで集結して車両編成するが、欧州から中国へのコンテナの集結地と列車編成センターは今後ベラルーシのミンスクに建設する予定である。

新疆から周辺国に2つの交通ルート of 建設を計画している。その1つは、中パ経済回廊であり、パキスタンのグワダル港から新疆のカシュガル間に、鉄道、道路とパイプラインを建設する。また、西方向の中国-キルギス-ウズベキスタンの鉄道建設がある。ほかにも、カザフスタン国境で「中・カザフ国境合作」として、双方が開発区を設ける。また、東北部のロシア、モンゴルとも「中俄蒙経済回廊」の建設に関して協定に調印した。

第二に、文化教育と一帯一路。新疆はシルクロード沿線国である中央アジア諸国と文化、言語、宗教などの分野でのつながりが多いため、文化、教育の協力も多い。新疆は外国留学生7000人を受け入れているが、中央アジア諸国からの留学生が70%を占める。新疆は留学生に様々な奨学金を提供している。また、新疆は周辺諸国に10カ所の孔子学院を設立し、新疆側は孔子学院建設の初期投資を負担し、教師と教材を提供するが、所在国は場所を提供する。運転資金はそれぞれが半分負担する。

第三に、社会安定を図る努力。幾つかの事業を進めた。その1、政府は「訪恵聚（訪民情、恵民生、聚民心）」活動を2014年から始めた。毎年7万人の幹部を1万以上の村に派遣し、1年間滞在し、村民の生活改善、地元幹部の仕事態度の改善、社会安定を図る。その2、全国19の省・市が新疆の各地域に「対口（タイアップ）支援」を2010年から実施した。各省・市は財政収入の1~3%を新疆に投入し、指定地域の民生改善、雇用拡大、インフラ整備、産業振興など、全面的に支援する。その3、少数民族が集中し、発展が遅れた南部4州・地区では、14年間（幼稚園2年を加える）の義務教育を実施

し、今後新疆全域に拡大する。その4、各地域に適した産業を発展させる。観光資源を活用し、観光業を主要産業に育成した。今年1~8月、来疆した観光客はすでに延べ8000万人に達し、通年では1億人を上回る見通しである。観光収入はすでにGDPの15%を占めるようになっていいる。また、新疆の綿花資源を生かして、紡績業の規模は2000万錠を上回り、全国で最大規模である。紡績工場は県レベルに立地し、地元雇用安定に貢献している。

ウルムチでは、訪問団はウイグル族が集中する地域に設けられたウイグル風の「国際大巴札（市場）」を見学した。また、ウルムチ市を展望できる紅山公園も見学した。

カシュガル（喀什）での訪問と見学

8月27日、ウルムチから空路で1時間半の飛行を経て、訪問団は新疆南部の最大都市、カシュガルに到着した。

カシュガル地区の麦麦提明・白克力副専員、地区外事弁公室徐継明主任、地区華僑連合会王傑副主席が訪問団と会見し、カシュガルの状況を紹介した。

カシュガル地区は面積16.2万平方キロ、1市と11県を管轄する。人口は460万人、漢民族は10%しか占めていない。カシュガル市は人口70万を超え、ウイグル族は人口の80~82%を占め、漢民族は10%である。

カシュガルは一帯一路において、重要な地位を占めている。中パ経済回廊の起点はカシュガルである。パキスタン国境に至る高速道路はすでに着工した。鉄道については、駅の立地選択作業を進めている。カシュガル空港はパキスタンのイスラマバート、UAEのシャールジャへの国際便が開通している。ほかにも2カ所の空港が建設中、1カ所の空港が認可待ちである。

カシュガル経済特区は2010年に設立され、保税區の機能を果たしている。中パ経済回廊の関連事業として、カシュガル市とタシクルガン（塔什庫爾干）県で物流センターを現在建設中である。

また、カシュガルは「対口支援」の重点地域でもあり、山東省、広東省、上海市と深圳市がカシュガル地区に毎年60~70億元の資金を投入し、各分野において、発展を支援している。

カシュガル市では、再開発した旧市街区と艾提尕爾清真寺（エイティガル・モスク）を見学

した。

カシュガル市旧市街区は千年以上の歴史を持ち、ウイグル族の人々が居住する地域であり、建物が老朽化し、生活不便の問題が顕在化したため、2008年から再開発事業が始まり、2015年には22万人が居住する中心区の再開発が完成した。旧市街区内に、分野別で鉄器、陶器、楽器、生活用品の職人街が設けられている。旧市街区はすでに5A級の観光地と認定され、カシュガル随一の観光名所となった。また、世界で最も成功した旧市街区の開発と国連からも評価されている。

エイティガル・モスクは約600年の歴史を持ち、新疆のみならず、中国全国でも最大規模のモスクである。一度で数千人の礼拝ができる。

タシクルガンとパキスタン国境

8月28日、訪問団はカシュガルからタシクルガン（塔什庫爾干）を経由して、パキスタン国境のクンジェラブ峠（紅其拉甫山口）に向かった。目的は中パ経済回廊の中国側の地域を視察することである。

訪問団を乗せたマイクロバスは314号国道に沿って、西に行ってから南下する。国道は川の峡谷に沿って、パミール（帕米爾）高原に向かって登る。中パ経済回廊建設の一部である道路の新築と拡張工事の現場を見た。地形からみても難工事になると分かる。今後鉄道を建設するとなるとさらに難しいと感じた。道路を走るのは観光客を乗せたバスやSUV車が多い。大型トラックもあるが、一部はタジキスタンのナンバープレートを付けていた。

沿線の景色も美しい。標高7719メートルのコングール（公格爾）山と7546メートルのムスターグ・アタ（幕士塔格）山が聳えて、夏でも山頂の雪が溶けず、たくさんの氷河が近くに見える。

タシクルガンの県境に入り、幕士塔格氷河公園のそばに、タジキスタンの国境に設けたカラス税関事務所（カラ蘇口岸）がある。この税関事務所は国境まで14キロ、標高4000メートルを超える。事務所の職員によると、5月から11月末までの運行期間中、毎日数十台のトラックが通関する。

夕方には、タシクルガン県の県庁所在地、標高3200メートルのタシクルガン鎮に到着した。同県副県長の紹介によると、タシクルガン・タ

ジキ族自治県は、面積2.4万平方キロ、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタンの三カ国と隣接し、人口3.3万人である。タジキ族は中国唯一のヨーロッパ人種と言われている。訪問団はタシクルガン博物館でタジキ民俗館を見学した。また、現地の観光名所、古代蝸盤陀国のお城である石頭城、高原湿地の金草灘を見学した。

8月29日、訪問団一行は今回視察の最終目的地、パキスタン国境のクンジェラブ峠（紅其拉甫山口）に向けて出発した。途中で、アフガニスタンにつなぐ「瓦罕走廊」への交差点で下車し写真をとった。沿線には、タジキ族の村が点在し、多くの家屋は政府の補助金で建てた新築家屋であるとすぐ分かる。

タシクルガンから180キロ、3時間をかけて、標高5100メートルのクンジェラブ峠に到着した。国境の中国側に、大きなゲートがあり、その先はパキスタン領である。現在、中国・パキスタン国際道路はこの国境を通過するが、将来、高速道路、鉄道、パイプラインもこの峠を通過する。見学する際、中国各地から来る多くの観光客と出会ったが、通関する人とトラックはなかった。

8月30日、訪問団の新疆訪問は終わり、ウルムチで解散した。

訪問の収穫

この一週間の訪問を通じて、訪問団の一行は、以下のような収穫があった。

第1に、日中関係、東シナ海と南シナ海問題などの外交政策、華僑華人政策などについて、中国の政府部門や研究機関と意見交換ができた。

第2に、新疆訪問を通じて、新疆の経済発展や社会安定を体験し、異なる文化に触れ、新疆に対する理解を深めた。

第3に、新疆での現地視察を通じて、一带一路の意義、中国及び周辺諸国にもたらす利益、そして現在の進展と直面する問題と困難についても、認識を深めた。

（文責：拓殖大学教授 朱炎）